# 浅利良道と直川村

山下　貞男
（会員・直川村河内）

## その面影

大分県歌人として、生涯を短歌一筋に生きた孤独の人、浅利良道先生が逝いてもう三年が過ぎた。

昭和五十二年四月、別府国立病院で亡くなられるまで、実に五十有余年短歌と共に生きた人である。

生来病弱なため幾度か病院療養生活を送り、常々虚弱と闘いながら、短歌を自分の生命として生きられた先生が、まだ存命であった昭和四十七年か八年の頃、私は大分合同新聞の短歌欄に投稿して、三度ばかり選を受けて登載された事がある。佐伯市に住居せらるる先輩の知人から先生の事を聞かされ、折があれば親しく旧直見村の事ども話して見度いと思い乍ら、とうとうその機会がなく終った。「直川のその人に逢いたいなあー」と言われた、と後に右の知人から聞かされ、遂に一度の面談も出来ずに終った事に、私はいまだに心の責を感じている。それは晩年の良道師を見舞い得ず、一介の無縁の子弟関係に終った事と、五十年前の古い思い出話を聞けなかった無念さである。

薄倖な境涯を短歌でさゝえ、純粋な歌人として人生を全うしたところに、私は益々崇敬の念を抱いてゐる。

先生は昭和九年に大分合同新聞（当時大分新聞）の歌壇選者となり、以後は大分県短歌界の重鎮として、協会を組織したり、短歌誌の統合や改題、組織の変更等をなし、幾度か短歌会の浮沈を乗り越えて、大分県歌壇に尽された功績は実に大きい。昭和二十五年には合同新聞社より文化功労賞を受けられ、晩年まで選者の任にあたり生涯を終えた人である。

因に『浅利良道短歌集』があり、五千三百余の短歌が集録されてゐる。

## 良道と直見村

直見村とは、現在は直川村であるが、昭和二十七年に旧名川原木村と合併するまでは、直見村と言った。

昭和四年の夏から、浅利良道先生は、直見村の久留須日豊線神ノ原駅（現直川駅）前の民家に、約一年半位居住せられた。

今からちょうど五十年前、即ち昭和四年の七月の或る炎熱の日、神ノ原駅前の民家に一人の人物が旅装を解いた。一見やさしさの中にきりっとしたものを感じさせる。そして何か内に秘め事をもつような憂いを外に含むようなタイプの人、近所の人達には畏敬の念をもたせた。品の良い風格があった。慣れるに随い此の人が案外人なつこく、誰れにも気易くつき合いができる人柄であることが、人々の心をなごませた。此の人が青年歌人浅利良道氏で、実兄の製材業の手助けをするために始めて直川村に来られた初の印象である。当時は交通事情がまだ開けて居らず、谷深い山からの木材や木炭等の林産物及び農産物等の集荷販出には、荷馬車を利用する以外専ら日豊線の貨物列車に依存する事が大きく、神の原駅は当時直川の重要な産業の拠点であった。従って多くの人々の出入が頻繁であった。

若き良道氏は、実兄の木材業の助手として、駅に集荷される木材の受付発送業務や、先山の買い出し等に、従事した。毎日が忙しいのではなく、ひまな時には、歌作や読書にふける日もあり、近郷を遊ぶ日もあり、追々土地に慣れ、人にも慣れて来た。

真裸になりて荷物の縄を解くかくすこやけくあれよと思う。

暁のかな〳〵の声すみ通りもの悲しけど去ぬべきにあらず

書きものに仕事に追われ日を過ごすいまだ近くの川にも行かず

忙しき用持ち道を歩きおりさびしきもすでに過ぎにたらむか

朝夕に通るかるいの人々にものは言いつつ和む心か

故郷ゆ連れ来りし雇い人も仕事しまいて帰らせにけり

ほととぎすいづくにおりて啼くならむただ青々と幾重夏山

水の面に浮く紅に目をとめて何とど見れば萩の花びら

その頃既に発行されてゐた歌集『大分歌人』に同人として文芸品や短歌を発表してゐたが、偶々友人長田良太郎を知り、遇然にも長田氏が直川村の仁田原出身とあって交友、大いに親交を深めた。直見村に第一歩を跡した二週間か三週間経過して長田氏の訪問を受け、大いに語りまた長田氏を訪問しては、身上を打ちあけたり希望を語り合ったりして作歌上の経験抱負を生かした。

この村に来りて我れのよろこびと言わむか今日を人に会いたり

おそくまで歌に語りて更かしたりかゝる日ありとわが頼みしか

長田氏を訪問したときの歌に

がっしりと組まれてかたき石の垣ここぞと思い身を添い歩む

軒をおほう前山寂しかゝるとこに一生を君は住み給うなり

わが友と遊ぶ川辺の岩の上にほてを拾いぬ火手というもの

良道氏は、亦ときには長歌をも作り、数十篇を残されてゐる。直見に居られたときの一篇を左に写す。

煮猪憶友

前山に鹿ぞ鳴くなる
山々は紅くもみづる
奥山はましてもみづる
もみ出たる谷々こえて
あそぶもの大き猪
そを捕ると村の猟夫等
銃もちて捕縄さげて
日毎にぞ山に行くなる

今日の日も親猪捕りつ
明日は又子猪捕らむと
祝酒に騒ぎわめける
そを我れは裂きてたまいて
をとついも昨日もたべつ
今日もまた焙りてたべつ
あなうまと食べはしつゝ
おのづから思いは出づれ
故郷のわが友達よ
然はあれど豈送らめや
来ぬとう者等に

交友小野さんより多量の猪肉を戴き、珍しくもまた嬉しい感想の歌を添う。

良道氏の直見村に於ける生活は、僅かに一年と七か月の短い期間でしたが、生涯中最も思い出の深い経験ではなかったろうかと思う。

良道氏が逝去されて三年、直見村を去って五十年、既に半世紀の昔語りであるが、現在直川村にゆかりのある文学者としての浅利良道氏の短歌を顕彰し、何日の日か直川駅前の広場に、歌碑の一基を建て度いものである。

## 受贈図書紹介

臼杵史談　第七十一号（六〇ページ）
石山本願寺と臼杵、資料で見る禹稷合祀ノ壇など、充実した内容、感謝。

玖珠郡史談　創刊号（三六ページ）
佐伯藩にはゆかりある森藩の地、今後も機関誌の交換を約束し、研究の提携が期待される。

郷土佐伯の碑文　益田学著（二一八ページ）
別項の通りであるが、とくに史談会に御寄贈をうけた。末長く愛蔵して、次の世代の史談会員に活用させたい。

九重の文化財（宝山文庫）
九重町甲斐素純氏より寄贈さる。

歴史手帖　11　東京　名著出版社より
日向地方の歴史と民俗の特集号

四国八十八ケ所　上下二冊組
高知市細木渓龍氏より恵贈さる。往年の四国順拝の旅の想い出資料。